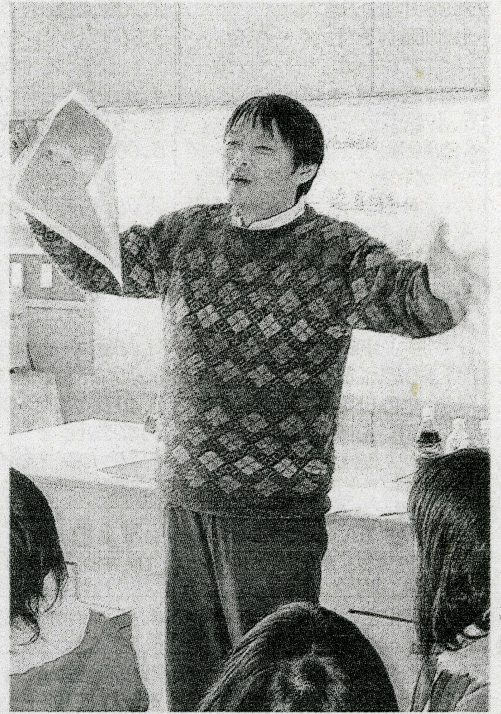


04.03.15
五日本

椎田町で出前授業 2年目の 長崎大学助教授

中村 修さん (46)



なかむら・おさむ 佐賀県唐津市出身。1976年大阪大学工学部入学。85年九州大学大学院農学研究科修了。京都精華大学講師を経て97年、長崎大学環境科学部助教授。2000年にNPO法人「地域循環研究所」設立、同研究所理事長。著書に「やさしい減農薬の話」（北斗出版）など。長崎市在住。

食の大切さを呼びかける

し尿を発酵させた液肥を農家に供給する椎田町。「循環型農業の先進地」と注目される一方で、「し尿」の一般的なイメージから、声高に「液肥で作った食べ物」をPRできないという悩みもあった。そこで、まず子どもたちに「液肥で作った食べ物おいしい」ことを伝えて理解を広げようと計画。町の依頼を受けて小学校で「出前授業」に取り組んでいるのが、長崎大学環境科学部の中村修助教授(46)。「子どもは食生活を変えないと日本の農業はよくならない」という中村助教授に聞いた。

「子どもたちは最初、し尿で作った肥料に抵抗感があったとか。『みずくね。しかし、資源循環の仕組みや農業や化学肥料を使わない農業の大切さについて知ること、液肥で作ったお米はおいしい』と肯定

的にとらえられるようになりまし

「今では、学校給食にも使われています。『液肥米は昨年九月から導入されました。まさに地産地消の実践です。が、『し尿は宝』という価値観を伝えなければ、この米の持つ本当の意味は理解されず、今後の広がりには期待できない。そのための出前授業です」

「出前授業では、生活習慣病予防の食生活についても触れている。『自分たちの健康を守るためには、理想の食事

を考えたアプローチも必要と考えました。それを通して、液肥を使った食べ物大切さを知らることにま

「なるほど。『バケツで育てた稲の観察を通して、食物連鎖や資源の循環について教えたつもりでしたが、子どもたちの心に残らなかった。有機農業や地産地消を説くなら、子どもたちの食生活から変えなければいけないので

「もともと工学部。『汚水の浄化を研究し

「本で調べさせても、フランスよく食事を『もつ野菜を食べる』などのお題目ばかりで終わりがち。最初に大学生の食事を写真で見せたのですが、ハンバーガーとコーラ、栄養補助食品だけ、結果的に農業が三分の一になった。減農薬作物にも引き合いが来るよ

「農業を変えたいと思

「しかし、採算や労力を無視した市民運動の視点は偏った無農薬農業には懐疑的でした。佐賀県で『害虫がいるときだけ農薬を使おう』と呼びかけ、結果的に農業が三分の一になった。減農薬作物にも引き合いが来るよ

でも、元の水をきれいにうになり、農家が進んでる発想がなかった。公害は利潤追求の論理が生み出した社会問題です。経済学は山を崩し海を埋め立てて空港を造り、自然を破壊すること

「砂糖を多用した無果汁のジュース。塩分、脂害被害の現場に足を運ぶ、環境問題を考えているうちに有機農業への関心が深まり、農家との交流が始まったんです

「砂糖を多用した無果汁のジュース。塩分、脂害被害の現場に足を運ぶ、環境問題を考えているうちに有機農業への関心が深まり、農家との交流が始まったんです

「出前授業は、来年度で三年目です。

「利潤を優先する企業が生まれ出した社会的な問題。子どもたちも『こまかさされて、生活習慣病になるようなものを食べさせられている』と気付けば、地元生産の旬の素材を見合った価格で買うことが大切だと理解できるようになると思います」

「出前授業は、来年度で三年目です。

「利潤を優先する企業が生まれ出した社会的な問題。子どもたちも『こまかさされて、生活習慣病になるようなものを食べさせられている』と気付けば、地元生産の旬の素材を見合った価格で買うことが大切だと理解できるようになると思います」

「出前授業は、来年度で三年目です。

「利潤を優先する企業が生まれ出した社会的な問題。子どもたちも『こまかさされて、生活習慣病になるようなものを食べさせられている』と気付けば、地元生産の旬の素材を見合った価格で買うことが大切だと理解できるようになると思います」

「三日間の食事を写真

「汚水の浄化を研究し

ひと 日曜と